

あとがき

国連創設70周年の2015年、国連は、将来世代も含めた人類共通の利益を守るための第一歩を未来に向けて踏み出した。2015年9月に持続可能な開発目標（SDGs）が国連総会で採択されたことがその1つである。同年12月には、国連気候変動枠組条約第21回締約国会合（COP21）においてパリ協定も採択され、2020年以降の温室効果ガスの削減の義務を196カ国・地域が受け入れた。国際機構が実効性をあげることで、そして、国際機構とどのように協力するかは、世界中すべての人の運命に関わる関心事であることは昔も今も変わらない。

国際機構の多様な機能や役割について理解するには、断片的ではなく、まとまった知識と理解が必要となる。本書の執筆者は、2つの視点を心がけた。

1つめは、国連をはじめとする国際機構に共通する特徴を見出す視点である。それにより、国際機構の一般的な構造を理解できるようになる。国際機構の目的や権限が設立基本文書に定められていることを理解できれば、国際機構が実際にどのような活動ができるのかできないのか、わかる。本書はまた、職員、財政、意思決定など、政府間国際機構の共通する性格も紹介した。補助機関や専門機関といった混乱しやすい用語の整理もした。2つめの視点は、国際機構の多様性や主要な国際機構の独自性についての視点である。活動分野に関しては、国際機構の多様な機能を紹介することを心がけた。国際機構が積極的に問題に関与する分野と国家主権の裁量に任せる部分の多い分野とで国際機構の活動の様子は異なる。また、状況によって国際機構が効果的に活動できる場合とそうでない場合がある。読者の皆さんが国際機構について理解を深め、国際機構についてさらに興味をもっていただけたのであれば、執筆者一同にとってこれ以上の喜びはない。

本書は、国際法、国際政治、国際関係論を専門とし、国際機構の研究や実務についても経験を積んでいる研究者が執筆した。専門分野の知識がなくても国際機構が理解でき、さらに国際政治や国際経済分野についても学べるように、

本書は、書かれている。

本書の企画において、監修者の横田洋三先生と編著者、法律文化社編集部の舟木和久氏は、初学者向けの国際機構のテキストを執筆するという基本的な構想を共有した。また国際機構の多様性を網羅するために、各分野の研究者に加わってもらった。さらに国際機構についての基本資料も巻末に掲載した。資料を作成してくださった本多美樹先生に感謝申し上げる。表紙デザインの^{きょうかおり}許馥さんにもお礼申し上げる。許さんは、学生時代、平和や国際関係について学んでおり、未来への希望を展望する明るい表紙を描いてくれた。

読者の皆さんが、国際機構や国際機構が扱う問題に関心をもったのであれば、本書の参考文献（各章末・巻末）を利用して自分で調べてみてはどうだろう。また、仲間をつくって共に学ぶのもよい方法であろう。大学生向けの模擬国連や国際機構が主催するイベント・セミナーにも参加してみてもどうだろうか。

国連創設70周年と日本の国連加盟60周年という節目にあたり、「われら人民（We the peoples）」と始まる国連憲章の前文を想起させる文章で本書をしめくりたい。マララ・ユサフザイさんのノーベル平和賞受賞スピーチから、皆さんに伝えたい箇所がある。（YOMIURI ONLINE 2014年12月25日掲出の日本語訳、原文は英語。）

「私たちは、21世紀という現代に生き、不可能なことは何もないと皆が信じています。……この21世紀において、全ての子どもたちが質の高い教育を受けられる夢の実現に向けて、私たちは決心しなくてはなりません。

全ての人のために平等、正義、平和をもたらしましょう。政治家や世界の指導者だけでなく、私たち皆が貢献しなければなりません。私も、あなたも。これは私たちの義務なのです。

ですから私たちは行動しなくてはなりません。待ってはいけません。

私は仲間の子どもたちに世界中で立ち上がろうと呼びかけます。

みなさん、これで終わりにしようとした最後の世代になりましょう。

誰もいない教室、失われた子ども時代、無駄になった潜在能力——これらを私たちで終わらせましょう。」

2016年3月30日

編著者一同